

# 助成年度：平成 10 年度

[所属] 信州大学 農学部

[役職] 教授

[氏名] 木村 和弘 (他計 9 名)

[課題]

## 棚田の文化的景観保全と継続的土地利用システムの開発

[内容]

棚田への関心が高まっている。本研究は、長野県の「姨捨・田毎の月」地区を中心に、棚田の保全の方法とそのための整備方法などの土地利用システムについて検討した。

棚田とは、1/20 以上の急傾斜地に存在する水田で、整備地も未整備地も含まれる。棚田での農作業の実態を検討し、農業機械の利用もできない未整備の棚田では、今後、農業の継続が困難であること。また、棚田の国土保全や景観保全などの機能は、その機能を発揮するためには、それぞれ棚田の形態が異なることを明らかにした。

そして、棚田を保全する動きは、(1)耕作条件を改善させる棚田整備による保全と(2)未整備のままの保全、の二つに分けられる。(1)の中には、今までの生産性の向上を求めた圃場整備だけでなく、旧来の景観を残すための整備も行われている。

棚田の保全のための整備工法として、①地区全域を対象とする圃場整備型、②道路や区画の一部の整備をする田直し型、③旧来の姿を保全する姨捨モデル型、の三つに区分できる。①の圃場整備では地区の荒廃状況との関係が密接で、荒廃率 30%未満で事業を企画しないと実施できないこと、②は荒廃化の著しい地区が対象になり、保全の効果は部分的であること。③は新しい棚田の保全整備方法であるが、整備可能の範囲は 3~5ha が限度あること、などを明らかにした。

また、都市住民などのボランティアやオーナー制度による耕作者など、新たな担い手が生れている。これらによる保全の条件を示した。

以上の結果をふまえて、いくつかの棚田の保全計画作りに参加し、未整備のまま保全する地区、整備する地区にゾーニングして、類型化した整備方式を導入することを提案している。